

アクティブラーニングへの取り組みと課題

— 学習空間整備と授業実践をふまえて —

Challenge and Future Prospects of Active Learning:
Preparation of Learning Space, a Practice of Lectures and Beyond

九州大学高等教育開発推進センター・助教 小島健太郎
九州大学情報基盤研究開発センター・講師 井上 仁

Center for Research and Advancement in Higher Education Kentaro Kojima
Research Institute for Information Technology Hitoshi Inoue

Abstract:

Active learning is introduced into higher education in order to help and promote student's learning. For the active learning, in addition to the practice of teachers of various teaching methods in each class, organized efforts are made. From 2009, the authors have been participating in ongoing maintenance and management of active learning studio, which is installed at Ito campus center zone. At the same time, we have a teaching practice, in order to accumulate of knowledge about the use of the studio. Based on these activities, in this paper, we share efforts to introduction of active learning and give discussion about challenge and future prospects about active learning.

キーワード：アクティブラーニング，学習空間，授業実践

Keywords: active learning, learning space, practice of lectures

1. はじめに

学生の能動的な学びを促し，支援することを目的とし，大学教育においてアクティブラーニングを意図的に導入する試みが広がりつつある。大学教育におけるアクティブラーニングの導入にあたっては，個々の授業における教師による様々な教授法の実践に加え，組織的取り組みがなされている。

著者らは，伊都キャンパスセンターゾーンに設置されているアクティブラーニングスタジオ型教室の整備及び運営に平成21年度から継続的に関わってきた。また同時に，教室の活用及びアクティブラーニングに関する知見の蓄積を意図し，授業実践を行ってきた^[1]。これらの活動をふまえ，本稿ではアクティブラーニングへの取り組み事例を紹介しそこで得た知見の共有を図るとともに，今後アクティブラーニングに取り組むにあたっての課題を検討する。

本稿は以下の構成を取る。まず2章では大学教育におけるアクティブラーニングに関する動向を概観する。3章では，著者らが関わった九州大学におけるアクティブラーニングスタジオ型教室整備について述べる。4章では，アクティブラーニングを意図的に導入した授業実践とそこでの学生の反応をもとに考察を述べる。最後に5章においてアクティブラーニングに関する今後の課題を議論する。

表 1：アクティブラーニングに関する取り組み例

個人（教授者側）レベルでの取り組み	組織レベルでの取り組み
教授方法の改善，授業デザインの検討，課題設定や教材開発，学習内容評価の検討	教授方法の改善へ向けた FD 等の組織的取り組み，学習環境の整備（教室，および図書館等の課外活動スペースも含む），カリキュラムの見直し，授業支援スタッフの育成

2. アクティブラーニングを巡る動向

大学教育においてアクティブラーニングは，しばしば典型的な講義型授業 大講義室で教員が一方向的に講義内容を説明し，学生はそれを黙々と聴講する と対比的に取り上げられる。アクティブラーニングを取り入れた授業という場合，そこでは学生の主体的・能動的な授業への参与を促す工夫が意図的に組み込まれており，具体的には学生参加型授業，協調・協同学習，発見学習，グループディスカッション，課題解決・探求学習，PBL（Problem/Project Based Learning）などといった授業形態や授業デザインを指す^[2]。また，これら教育を企画し実施する側の取り組みとしてのアクティブラーニング導入に加え，学習者の視点から捉えたアクティブラーニングとして，読解，文章作成，議論，問題解決という学習プロセスを通じ，分析，統合，評価と言った高次思考を伴う学習を指し参照されることもある^[3]。アクティブラーニングは，学生の学習活動の実際に目を向けつつ教育の課題に取り組む際の方略として，大学教育に関わる人々の関心を高めてきている。

教員個々の授業においてアクティブラーニングの導入に取り組む際には，上述のような様々な授業形態やデザインの実践が主だったものとなる。さらには，多様な授業形態を実現するために，しばしば ICT（Information and Communications Technology）の活用を伴う。アクティブラーニングが導入された授業実践に関する広範な文献調査^[4]によると，アクティブラーニングは講義型，および演習型授業の両方で実施され，かつその授業が取り扱う内容（学問分野）も幅広い。また，アクティブラーニングを実現するために取り入れられる特徴的な工夫としても，高次思考を意図するもの，他者の視点強化を意図するもの，授業外学習サポートを意図するもの，様々な授業間の連携を意図するもの，など多岐にわたっている。

大学教育におけるアクティブラーニングへの取り組みは，授業担当教員個々の授業実践のレベルのみならず，組織的なレベルにおいても実施されている。国内での先進的な一例としては，東京大学の駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS）における取り組みがあげられる^[5]。KALS の取り組みにおける特徴の一つは，アクティブラーニングを支える基盤として，個々の授業のみではなく学習環境^[6]，なかでも学習空間の整備を進めた点にある。これにより，汎用性の高い学習空間を中心とし，大学の一般的な講義室を前提としない多様な授業形態の実施や，正課外学習との連結，FD への展開などが図られている。また，個々の授業におけるアクティブラーニングの導入に留まらず，カリキュラムの見直しと併せたレベルでアクティブラーニングを議論する試みもなされている^[4]。

このように，アクティブラーニングに関わる取り組みは，個人/組織の両方のレベルにおいて実践されてきている。それぞれの取り組みの典型例を表 1 に記す。これらの取り組みは，その規模と

して大小様々なものを含み、今後更に拡大が進むと思われる。

その内容や規模において様々なものを含むアクティブラーニングという概念は、それ自体を明確化することの困難さも指摘されている¹⁷⁾。しかしながら、アクティブラーニングを取り巻く現状に鑑みて、今日の大学教育においては、従来から典型的に見られた大講義室での受動的な学びを前提せず、学習・教育について多様な在り方・可能性の検討や実施が、教員個々のレベルや組織的なレベルにおいてなされている、ということは確かである。著者らは、これらのアクティブラーニングに関わる様々な活動を、持続的に、また効果的に教育改善へとつなげていくことは、取り組む意義のある課題の一つだと考える。

このような背景において、著者らは九州大学においてアクティブラーニングスタジオ型教室の整備やアクティブラーニングを導入した授業実践へ関わってきた。以下では、それらの事例を紹介するとともに、大学教育においてアクティブラーニングを取り上げる意義について考察を行い、今後のアクティブラーニングに関わる課題の明確化を試みる。

3. アクティブラーニングスタジオ型学習空間の整備

九州大学では、アクティブラーニングに関わる組織的な取り組みの一環として、伊都キャンパスセンター1号館にアクティブラーニングスタジオ型教室の整備がなされている。この教室整備は、平成21年度から22年度にかけ実施され、著者らはその導入や管理運営に関わってきた。以下では、このアクティブラーニングスタジオ型教室整備に関して、その際検討された事項や教室の設備等を述べる。

アクティブラーニングスタジオ型教室の整備を検討する上では、その想定される利用形態を念頭に置く必要がある。しかしながら、上述のようにアクティブラーニングを導入する授業のスタイルは多様であり、事前に利用形態を想定するにあたっては限界があることも確かである。今回の整備にあたっては、典型的なアクティブラーニング型授業の要素として以下の点が想定された：

- ・座学、講義聴講に限定されない学習形態を取り入れる
- ・授業参加者（教員と学生、及び学生同士）の双方向性を高める
- ・学習者のアウトプットを重視する
- ・ICT 機器を活用する

一般に、教室を整備する際には部屋の面積や整備に関わる予算といった制約も存在する。今回の整備にあたっては、教室の面積がおよそ9m×12mであり、授業受講人数の上限となる収容人員は50名を想定している。¹ また、教室に隣接する位置に、資材収納及び授業支援スタッフのためのスペースが確保されている。

¹ この面積に対する収容可能人員は、伊都キャンパスセンターゾーンにおける他の標準的な講義室に比べ、小さい。例えば、センター1、2号館にいくつか存在するおよそ7m×10mの面積を持つ講義室では、収容人員は60名前後である。これは、後に述べるように可搬性の高い什器類を設置するためには、比較的広いスペースが要求されることに起因している。

表2：アクティブラーニングスタジオ型教室に導入された設備と整備方針との関連

教室に導入された設備	関連する整備方針
可搬性の高い什器類（リボン型テーブル32台，椅子50脚）	(a) (b)
4面スクリーン及びプロジェクター	(a) (b) (c) (d)
Apple iPod Touch 50台	(b) (c) (d)
小型ホワイトボード 28枚	(b) (c)
ノート型PC 11台	(c) (d)
アクティブボード（電子白板）	(d)
自動講義集録システム	(d)

上記を念頭に置いた上で、さらに可能な限り汎用的な利用を実現する学習空間としての性質を保つことが考慮に入れられている。結果、以下の点を教室整備の基本的な方針として挙げることができる：

- (a) 多様な授業形態を可能にする空間
- (b) コミュニケーションを促す空間
- (c) 知識のアウトプットや可視化を促す空間
- (d) ICTの有効活用が可能な空間

アクティブラーニングスタジオ型教室には、この各項目を実現するため、いくつかの特徴的な設備が導入されているが、それらと上記の整備方針との主な関連を表2にまとめている。以下では、上記整備方針と関連させ、特徴的な設備について詳しく述べる。

(a) 多様な授業形態を可能にする空間 前述のように、アクティブラーニングを導入する授業においては、講義型・演習型両方の授業がなされることが想定される。また、上述したKALSにおける授業形態の例を見ても、(i) 講義＋ディスカッション型、(ii) タブレットPC活用型、(iii) プレゼンテーション型、(iv) 実習型の4つの類型化がなされている^[8]。今回の整備においては、特に講義、ディスカッション、プレゼンテーション、実習での利用を想定し、自由な機の配置ができるよう可動式のリボン型の机と椅子が導入された（図1左）。机は一台につき最大4人まで着席可能なサイズであり、可搬性の高さは授業の実施形式に応じた様々な机・椅子のレイアウトを容易に実現可能としている。さらに、教室壁面には4面のスクリーン及びプロジェクターが設置され、教室における固定された前後左右という概念を弱め、什器類レイアウトの自由度の高さが活かされる空間設計となっている。4面スクリーンのうち一つはガラス製のボードであり、板書用のホワイトボードとしての利用も可能である。PCとプロジェクターとの接続は、有線と無線の両方が利用可能なシステムを有しており、各スクリーンには独立した映像を投影することが可能である。教員は、PCの操作にリモコンを使うことにより、教室の一つのスクリーンの前に拘束されることなく、教室内を自由に移動しながら授業を行うことが可能であり、また学生は、どのような機のレイアウトで授業を受講していても、自分が見やすいスクリーンを容易に見ることができる。



図 1：アクティブラーニングスタジオ型教室に導入された机，椅子，及び小型ホワイトボード

(b) コミュニケーションを促す空間 アクティブラーニングを導入する授業においては，しばしばグループディスカッションのような学生同士のコミュニケーションや，授業に対するフィードバックなどの教員と学生間のコミュニケーションが取り入れられる。可搬性の高い什器類は，様々な形態でのグループ活動を実施可能にしておき，また教室に設置された小型のホワイトボード（図 1）を用いることで，ディスカッションの活性化を図ることができる。iPod Touch と共に導入されたパーソナルレスポンスシステム（BeeDance^[9]）は，教員の質問に対して学生が一斉に回答し，その結果をリアルタイムで表示する機能を持つ。これにより，学生が授業内容に対するフィードバックを正確に与える事が容易になる。また，クラス内の潜在的な意見を可視化することで，学生同士の間接的なコミュニケーションを生み出すことなども期待される。

(c) 知識のアウトプットや可視化を促す空間 小型ホワイトボードや 4 面スクリーン，ノート型 PC 等を複合的に利用することで，活動の記録，活動の成果の発表など，知識のアウトプットや可視化を効果的に実現可能である。ホワイトボードの内容をクラス全体で共有する際，またプレゼンテーションに利用する際には，ホワイトボードに備え付けのフックにより教室前面のガラスボードに掛けることが可能である（図 1 右）。さらに，コース管理システム(CMS)との連携により，授業時間内に作成したホワイトボードの内容を記録・保持し，後に学習を振り返る際に活用することも可能である。上述の BeeDance を利用することで，設問やテーマに対するクラス全体の考えを可視化することも可能である。これらの設備を活用し，授業時間内に個々人やグループでの意見や考えを可視化し，共有する作業は，授業への真剣かつ積極的な関わりを促す効果が期待される。

(d) ICT の有効活用が可能な空間 ノート型 PC や iPod Touch といった可搬型情報機器やスクリーンへ投影するプロジェクターを効果的に活用するため，教室には各種無線機器を整備している。これにより，情報機器のインターネット接続やプロジェクターとの接続をワイヤレス化し，授業形態に応じた様々な什器類のレイアウトを妨げることなく，情報機器の活用が可能である。また，PC と連携可能なアクティブボード（電子白板）を設置しており，教材開発の自由度を高めている。授

業の自動収録が可能なシステムも設置しており、授業の電子コンテンツ化、オープンコースウェアとの連携、などへの展開を可能としている。

この教室整備は平成21年度後半に実施され、平成22年度より教室の利用が開始された。利用開始学期である平成22年度前期は試行的に週2コマの授業での利用がなされ、後期は7コマの授業利用へと拡大した。また、授業以外のFDやシンポジウム等の開催においても、これまでに複数回の教室利用実績がある。現在では、アクティブラーニングを導入する授業において、講義室のセッティングや各種ICT機器のセットアップ等、授業準備として必要な事前・事後の様々な活動を支援するための人的体制も整いつつあり、平成23年度以降、より一層の教室利用の拡大がなされる見込みである。

4. 授業実践及び授業コメントをもとにした考察

著者らは、上述のアクティブラーニングスタジオ型教室において、協調・協同学習を中心としてアクティブラーニングを意図的に導入した授業の実践を行ってきた。本章では、平成22年度前期及び後期に開講した科目をもとに、そこでの授業での取り組みの一部について述べる。また、これらの授業では、教員へのレスポンスとして、様々な形で受講学生のコメントを採取してきた。このコメントをもとに、アクティブラーニングを意図した授業において学生がどのように学んでいるのかについて、考察を行う。なお、以下で取り上げる内容は、[a] 平成22年度前期全学教育教養教育科目少人数セミナー（担当井上仁，小島健太郎），[b] 平成22年度後期全学教育教養教育科目少人数セミナー（担当小島健太郎），[c] 平成22年度通年21世紀プログラム課程独自開講科目プログラム・ゼミ（担当小湊卓夫，小島健太郎），を元にしており、以下では[a]，[b]，[c]として参照する。受講学生数は、[a]，[b]，[c]それぞれ37名，8名，19名であり、いずれも初年次生が過半数を占めている。²

各授業[a]，[b]，[c]において扱ったテーマ（学問分野や問題設定）は、それぞれにおいて異なる。以下では個々の授業内容の詳細ではなく、アクティブラーニングを導入する意図と関連して、実施した授業の形態を中心に述べていく。

授業における教員・学生間の双方向性の確保 [a]，[b]においては、基本的に各回の授業，[c]においては一部の授業の終わりに5分程の時間を確保し、授業を受講しての気づきや疑問等をコメントとして書き残すよう求めた。この学生のコメントに対し、[a]においては教員が個々の学生に対し返答を記入して次週に返却した。また、[b]，[c]においては、学生全員のコメントから共有する意義があると感じたものを教員がピックアップし、誰のコメントかはわからない形に編集し、さらにそれに教員がコメントを加えたプリントを作成し、次週に返却した。これらのコメント採取とフィードバックのプロセスを取り込むことで、授業における教員・学生間の双方向性の確保が図

² [c] に関してはオムニバス形式の授業であり、小湊，小島に加え高等教育開発推進センターの教員の協力のもと実施された。

られている。加えて、[b]、[c] のフィードバックにおいては、受講学生は他者のコメントを（誰のものかはわからない形で）知ることになる。このような間接的な学生間のコミュニケーションは、クラス内における自己の相対化を促し、他者の視点を強化する効果を意図している。

協調学習・協同学習の導入 [a]、[b]、[c] いずれの授業においても、講義形式で進められる部分と、グループディスカッションやグループワークなどの演習形式で進められる部分の両方が、授業内に取り入れられた。後者のグループ活動は、協調学習や協同学習の実践事例^[10]等を参考に、協調学習については2～5名程度のグループでの活動をレポートなど個人の成果につなげるための学習活動、協同学習については最終的な成果物の作成までを4～10名程度のグループで行うもの、という区別のもと取り扱った。その上で、参加者の学習活動のサポートを意図し、以下に例示するようないくつかの配慮を行っている。レポート課題の相互添削を実施した協調学習においては、他者との議論において自身がいかに相手に寄与できるか、またいかに相手から寄与を受けたかを検討する機会を設け、またそれらの点について自己評価を行い活動を改善するためのワークシートを事前に準備し、授業内で利用した。[a]において実施された iPhone アプリケーションをデザインし作成していく協同学習においては、グループでの活動全体の進捗状況を把握し、また自身がうまくグループの中で機能しているかを検討する機会を設け、活動を逐次改善していくためのワークシートを事前に準備し、授業内で利用した。

課題探求学習の導入 上述した[a]における iPhone アプリケーションデザインに加え、[b]において実施した数理モデル構築課題では、グループによる協同学習において最終的な到達目標を明確化せず、受講学生らが課題を自ら設定し解決していく課題探求学習を導入した。また、課題探求学習のプロセスと成果は、同一授業内でもグループによって異なる。そのため、協同学習のプロセスの振り返りを授業内に盛り込み、さらにその振り返りをふまえて、学習のプロセスと成果をクラス内で共有するためのプレゼンテーション課題を課した。

ICT 機器の活用 協調学習や協同学習では、様々な成果物が授業時間内に作成される。[a]、[b]においては、これらの成果物や授業資料を効率的に共有し、授業時間外もアクセス可能にすることを主な目的として、CMS（九州大学 Web 学習システム）を利用した。また、上述の課題探求学習においては、1グループに対し1～3台のノート PC を配布し、調査やプレゼンテーション等に利用した。また、[a]においては、BeeDance を利用することで、クラス全体の理解度の可視化を行った。

これらの授業実践においては、学生の主体的活動が授業内で実現することが意図されている。以下では、授業内に採取した受講学生のコメントやレポートからの抜粋を元に、協調・協同学習や課題探求学習の導入により特徴的に現れたと思われる気づきや感想を示していく。学生のコメントは鍵括弧で括り、学年および受講授業を付記する。

まず、受講学生の多くは、協調学習や協同学習を通じ、自身が学んだことや自身の意見について

やり取りを行うことで、自身の考えや意見を他者の視点から捉えなおすことを試みていると思われる。また、他者の意見が自身の考えを進展させたという事への気づきもコメントの中に多く見られる。例としては、「自分と立場の違う人の意見が参考になった。(1年次 [a])」「伝える側、聞く側にもそれぞれの考えがあることが問題なんだなと思った。(1年次 [a])」「グループで自分の意見に対して他の人から意見をもらえたりして、自分の考え方が広がったと思います。(1年次 [a])」「良かったと思うことは、普段の授業じゃ経験できないみんなで考えると言うことができたことです。(1年次 [b])」「自分たちの研究を頑張っってやって来たけれど、発表しているんな意見を聞くことで、ああそうだなあとか、自分が気づかなかったことがわかった。(中略)自分では気づかないことがあると言うのをものすごく身にしみたので良かった。(1年次 [b])」「他の人の考え方について非常に興味深く思った。(中略)普段から自分とは違う人の自分とは違う考え方に触れることで物事を多面的に捉える能力が身に付くのではないのだろうか。(1年次 [c])」といったコメントが、典型的なものである。授業の場に、協同・協調学習を通じ他者の考えを参考に自身の考えを修正するプロセスを盛り込むことは、自身の考えを問いなおす契機を与えるという点で、学習者の知識や理解の深まりを促すことが期待される。³

また、課題探求型の学習後のコメントにおいては、授業の中で自身が様々なことを発見・発想するというプロセス、また問題に取り組み解答するというプロセスに関して意識的になっていると見られる内容が複数見られた。例としては、「前にやった、付箋を使ってアイデアを出し合うって言うやり方を今回自然に実践できたのがすごく良かったなと思う。(3年次 [b])」「求めていた結果がたとえ出なかったとしても、そこまで到達する課程(アイデア、考え方、発想、直感など)がとても大事だなと感じた。その計算過程やアイデアをもう一度振り返ってみた時に、新たな発見や発想が浮かぶことも大いにあり得ると思う。(3年次 [b])」「普段解く問題はパターンが決まっており、答えも既にあるので正誤が判断できるが、自ら作り出した疑問はどう答えるか、その答えが当たっているのかを判断するのが難しいと感じた。(1年次 [b])」といったコメントが典型的なものである。授業で取り組んだ課題探求学習においては、学習者が自ら学習していく内容を意図的にデザインしていく余地が大きいという点において自由度が高い。この自由度は、学習者の発想や発見を学習プロセスに盛り込むことに寄与していると考えられる。また、学生は学習活動を進めるにあたり、しばしばこれまでの活動を振り返り、修正をしつつ先を見通すことが要求される。この一連のプロセスにおいて、自身の学習活動を意識的に捉え、その様々な点を比較する思考が実現されやすいのではないかと考える。

上記の点に共通して現れているのは、学生が現在の自己の知識や学習活動を対象化し、他者との関連、自身の過去や将来的な見通しに対して比較対照する視点である。これらの自己省察を通じてもたらされる気づきを学生個々の学習活動の充実につなげるためには、学生が適切に自己の知識や学習をモニタリングしつつ、それをふまえ自ら意図的に学習活動をコントロールする、という循環

³ 学習における他者存在の意義は、古くから実証的に議論されている。例えば [11] [12] では、他者からの質問や批判を通じて学習者が自身の思考の制約条件に気づき、理解が深まっていくプロセスが示されている。今回取り上げた受講学生のコメントは、授業を振り返った際にそのようなプロセスを見いだしたことの帰結として現れたと捉える事が可能である。

するプロセスを実現することが重要だと考えられる。その循環は、自らの知識を他者や広い文脈において問いなおし、かつそれをふまえて絶えず自らの学習を調整しつつデザインしていく学習プロセスを想起させ、学生に期待される自律的・主体的に学習を進めていく能力にとって重要であろう。このプロセスを念頭に置くと、教師は、その役割において学生のモニタリングとコントロールの各々を促した支援することが可能ではないかと考えられる。本稿で取り上げた学生のコメントは、著者らの恣意的な選択を経たものであり、上記の推察をどの程度支持しうるかは明らかではない。今回の授業実践においてどの程度上記のような学習プロセスが促されたかをより正確に実証していくためには、今後より進んだ検証が必要である。⁴

ここで取り上げたような学生の気づきを伴う授業は、協調・協同学習や課題探求学習を意図的に導入することで、授業で取り扱う学習内容を問わず広く実現することが可能だろう。このようなアクティブラーニングを導入した授業形態を実施し、多様な学習活動を授業に導入することの意義は、想定される学習到達目標の達成度や学習成果との関連を持って初めて議論が可能である。個々の授業実践においては、上記の関連の把握を図りつつ、より効果的な教育活動へと繋がるよう、継続的な取り組みが必要であると考えられる。

5. 今後の課題

アクティブラーニングへの取り組みは、個々の教員の様々な実践とともに、組織的なレベルにおいても大学教育の中で広がりつつある。しかしながら、それらの取り組みの背景にある課題が、個々の実践と組織的取り組みの間で、どこまで、どのように共有されうるのかは、明確ではない。前者は、各々の教師が見いだしてきた教育の課題に対する取り組みとして重要であり、尊重されるべきであろう。では、後者においては、どのように課題を明確化できるのだろうか。

アクティブラーニングに関する組織的取り組みにおいては、個々の教育実践を支援する事が重要であるのは自明である。このような取り組みにおいては、本稿で紹介した学習空間整備やICT環境の整備などが可能である。また、アクティブラーニングを実践する教師の取り組みを蓄積し、公開するなど、教育に関する取り組みの共有化を行うことは、教員が様々な授業実践を行う際に参照可能な情報として有意義だと考えられる。

しかしながら、組織的取り組みにおいては、個々の教育実践を支援するのみに留まらないより発展的な検討が期待される。アクティブラーニングという教育の課題は、個々の学生がいかに学び育つかに関わるものであり、個々の授業の集積を含む学生の学習活動の全体に照らし合わせていかにあるべきかを問うことが可能である。そのような観点から、学生の教育過程において、教師が実践する個々の授業の取り組みが有機的連携を持って機能するよう、アクティブラーニングを捉え議論していくことが可能だと考えられる^[4]。また、そのような視座を持って、学習空間のみならず広く学習環境をいかにデザインしていくか、今後議論される余地があるだろう。その上で、個々の授業においてアクティブラーニングへ取り組むことの意義が、その効果や評価という議論を含みつつ、

⁴ より進んだ検証方法としては、例えば [12] に見られるような、学習における学習者間のやり取りの具体的内容の分析等が考えられる。

発展的に検討されうるとすると、それは教育に関する組織的取り組みとして意義ある課題になるのではないだろうか。

アクティブラーニングへの取り組みには、受動的に教わる学生を前提とした教育の乗り越えを図るべく、学びを問いなおす視点が通底している。その視点は、自ら有能に学び続けていく存在としての学生への信頼と期待の現れでもある。大学教育の取り組む意義ある課題として、今後アクティブラーニングに関する議論の発展が期待される。

(参考文献)

- [1] 小島健太郎, 井上仁 “学生の協同的關係を形成するアクティブラーニング型授業の試み”, 日本教育工学会第26回全国大会講演論文集, pp.661 662 (2010); “アクティブラーニング型学習空間の整備と授業実践”, 教育システム情報学会研究報告書, vol.25, no.4, pp.61 64, (2010 2011)
- [2] 中央教育審議会大学分科会 「学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ)」 (2008)
- [3] Bonwell, C.C., and Eison, J.A. “Active Learning: Creating Excitement in the Classroom”, ASHE-ERIC Higher Education Report No.1, Washington, D.C. George Washington University (1991)
- [4] 池上慎一 “アクティブ・ラーニング導入の実践的課題”, 名古屋高等教育研究, 第 7 号, pp. 269 287 (2007)
- [5] 林一雅 「ケーススタディ: 駒場アクティブラーニングスタジオ (東京大学)」, 山内祐平 (編著) 『学びの空間が大学を変える』, ボイックス, pp.17 42 (2010)
- [6] 美馬のゆり, 山内祐平 『「未来の学び」をデザインする 空間・活動・共同体』, 東京大学出版 (2005)
- [7] 三浦真琴 “Active Learning の理論と実践に関する一考察 LA を活用した授業実践報告 (1)” 関西大学高等教育研究, 創刊号, pp.25 35 (2010)
- [8] 林一雅 “ICT 支援型協調学習教室における授業の類型化 東京大学アクティブラーニングスタジオの事例から ”, 日本教育工学会第26回全国大会講演論文集, pp.919 920 (2010)
- [9] 株式会社 CSK “BeeDance” <http://csklc.jp/product/bee.html>
- [10] 杉江修治, 関田一彦, 安永悟, 三宅なほみ (編著) 『大学授業を活性化する方法』 玉川大学出版部 (2004)
- [11] 稲垣佳世子, 波多野誼余夫 『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界 (中公新書)』 中央公論社, pp.117 134 (1989)
- [12] 三宅なほみ 「理解におけるインターラクシオンとは何か」, 佐伯胖 (編) 『理解とは何か (コレクション認知科学)』, 東京大学出版会, pp.69 98 (2007)